

令和6年度

第1回本巢市総合教育会議議事録

(令和6年7月30日)

本巢市教育委員会

第 1 回 本 巢 市 総 合 教 育 会 議 議 事 録

- 1 開 会 令和6年7月30日(火) 午前9時30分
- 2 閉 会 令和6年7月30日(火) 午前11時30分
- 3 会議場所 市役所本庁舎 2階 災害対策本部
- 4 出席又は欠席した構成員

(1)出席構成員

市 長	藤原 勉
副 市 長	谷口 博文
教 育 長	川治 秀輝
教育委員	汲田 美枝子
教育委員	小澤 明年
教育委員	黒田 隆吉
教育委員	松浦 尚美

(2)欠席構成員

なし

- 5 説明のため出席した者の職氏名

市 長 部 局	総 務 部 長	村澤 勲
	企 画 部 長	林 玲一
教育委員会事務局	事 務 局 長	
	兼教育総務課長	高木 孝人
	参事兼学校教育課長	薄田 茂樹
	参事兼社会教育課長	野原 徹二
	幼児教育課長	脇田 純一
	小中学校長会長	戸村 和夫
	学校教育課主幹	新井 恒雄
	幼児教育課主幹	長沼 有希子
	子ども支援対策監	岡田 芳子
	教育総務課総括課長補佐	小林 恵美

- 6 協議事項

- (1) 学校教育課の取り組みについて
 - ・現在の本巢市内の子どもたちが抱える諸問題への対応
 - ・ファーストG I G AからセカンドG I G Aへ
- (2) 幼児教育課の取り組みについて
 - ・幼小架け橋プログラムについて
- (3) 社会教育課の取り組みについて

- ・ホープ防災リーダーズの取り組みについて

7 その他

開会 午前9時30分

高木事務局長：開会の宣言。市長にあいさつを求めた。

藤原市長：あいさつの中で、児童虐待について、本巢市の教育の課題への取り組み対応について話をした。

高木事務局長：各課3課の取り組みについて説明後、質疑、意見交換と進めていく。協議題（1）学校教育課の取り組みについて説明を求めた。

薄田課長：現在の本巢市内の子どもたちが抱える諸問題への対応について岡田子ども支援対策監、ファーストGIGAからセカンドGIGAへを薄田課長の順に説明する。岡田子ども支援対策監に説明を求めた。

岡田対策監：資料及びプレゼンにて説明した。
（資料 本巢っ子たちの姿 ～どの子にも育ちと学びが保障される社会に～）

薄田課長：子ども支援対策監の導入で一つ一つの初期対応や福祉支援課との連携の動きで子どもたちに寄り添い、丁寧な対応になってきていること。学び舎に通う児童生徒が増えてきているので、庁舎活用に次の段階に来ていることについて話をした。

薄田課長：資料及びプレゼンにて説明した。
（資料 ファーストGIGAからセカンドGIGAへ）

高木事務局長：学校教育課の取り組みについて質疑、意見を求めた。

黒田委員：本巢市の教育に対する理念や信念の元で様々な施策や事業が行われていることを日頃から感じている。岡田子ども支援対策監によって個の対応ではなく、組織での対応ができていて、感動した。マンパワーは充実していると思った。GIGAについて、他の市町村の授業を見る機会があったがノートがなく、タブレットのみで授業していた。端末を使用し授業を改善することで児童生徒の力がつく。説明の中ではハード面の話が多かった。これからはハード面に多額な予算を使っていくので、ソフト面・指導面に力を入れていかないといけないのではないかと。

戸村校長：虐待事案の窓口を一本化になり学校現場としては有り難い。各学校にチームの訪問があり、問題がある児童生徒の情報を共有し、窓口の明確化をしてもらえた。それで対応が早くなった。相談しやすい関係づくりができていて、学校の外で、地域住

民に自分は困っているという児童生徒から発信ができたらいい。地元のラジオ体操に参加しているが、子どもは一生懸命やっているが、地域の大人は参加をしていない。子どもが地域の大人と顔見知りになれば、子どもが困ったときに顔見知りの地域の大人に相談できたが、今は関係づくりが難しく、子どもが相談できない。地域で信頼し合える顔見知りの関係を作ることが課題ではないかと思っている。タブレットを活用して授業に生かすということだが、個別最適な学習に繋がる、協働的学習に繋がるということを職員に伝えていかないといけない。本校は研修を校内で行っても授業に関わるすべての職員が研修を受けられない。研修の時間が勤務時間と合わない職員がいるため。県職の非常勤職員も含めて夏休みにロイロノートを中心とした研修を行う予定でいる。研修をすることで授業の形も変わってくると思うし、いろいろな学校にも伝えながら、全ての学校で進んでいくように考えている。

- 藤原市長 : G I G A スクールは瑞穂市と北方町は早くやっているか。
- 薄田課長 : 早く揃えたい、予算を確定したと聞いている。
- 川治教育長 : 北方町は前年に国の指定を受けて一年先に回答している。急な展開になって共同で一緒にしないと来年できず単独だと高額になってしまう。
- 藤原市長 : 不登校 2～3 箇所で行っているが、課題は何か。不登校の子どもの数が多い。不登校の子との接点が作れないか。家から出られない、出ない子はどうやって接点を持っていくか。
- 岡田対策監 : 学び舎に通っていた子があることがあり、ぱったりと通えなくなり、家に引きこもってしまった。親も困り、学校と協議してアウトリーチ支援で相談員が家庭訪問をした。部屋からも出てこられなかった子が、アウトリーチ支援がうまくいき、学び舎へ再び通えるようになった。親の会にその子の父親が参加し、父親が今まで子どもに大きな、いろいろな負荷をかけすぎたことに気づいた。自分がよかれと思いいろいろ言っていたことが結果として子どもを追い詰めていたことがわかったと言っていた。小学校も中学校もなかなか家から出られない子については、担任や学校の先生が定期的に家庭訪問をしている。家庭訪問して会えなかったから終わりではなく、会えなくてもあなたのことを気にしているというサインは置いてくるように話している。誰も手が届かない子は一人もいない状態である。昨年

度は ICT に夢中で家から出られない子の事例は、校長先生が対応をしていて、その子は小中の連携を丁寧に行っていたので、中学校に入学して通えている。事態が動かないように思えても、誰かがあなたのことを気にしているというアクションを続けることで、何かその子の中に変化が生まれる。何もしなかったら何も変わらない。引きこもっていたら、引きこもっていることを悪とするのではなく、そこにどういう支援を打ち続けるかということが大事だと思っている。一例一例違うので、十把一絡げという訳には行かない。学び舎も有り難いことに校長先生方も気軽に寄って、その子と話をしたり、先生が寄ってもらえる。学校と対立してその子を孤立させるのではなく、学校を広げてもらい、いろいろな場にいる子、家でも、フリースクールでも、その子の学ぶ場。しかし学校の一員だという意識は大事にしたい。地域からは離れられないので、大人になったときにそこでいい思い出、いい繋がりは生きてくる。

高木事務局長：協議題（２）幼児教育課の取り組みについて説明を求めた。

脇田課長：本巢市版 幼小架け橋プログラムについて新井主幹、長沼主幹に説明を求めた。

新井主幹

長沼主幹：資料及びプレゼンにて説明した。

（資料 本巢市版 幼小架け橋プログラム）

高木事務局長：幼児教育課の取り組みについて質疑、意見を求めた。

松浦委員：年長のときに小学校へ行く体験をして、楽しかったという体験をして小学校へ行くのにスムーズだった。新しい環境に行くことが不安だと思うので、すばらしい取り組みだと思う。続けてほしい。

小澤委員：小１への不登校の人数９名とあるが、根尾だと幼稚園から小学校へそのまま全員入学すると思うが、席田だと一緒に幼稚園から小学校に入学だと思う。違うのは糸貫西幼稚園が一色小と土貴野小へ分かれると思うが、違いが出る場所が多いのか、先生方の交流というのは自分の小学校へ来るという幼稚園へ行くだけなのか。他の幼稚園へ行って全体を学んでいるのか。

長沼主幹：以前土貴野小学校に勤務していたので、そのときの交流の様子をお話しすると、夏休みに糸貫西幼稚園に保育の様子や教育の意図を学ぶために行くが、それは糸貫西幼稚園の先生が土貴野小にも一色小にも同じように声をかけてくれる。一緒に行って

学ぶ機会を作ることができる。こちらは生活科の取り組みをするなら、こちらは土貴野小学校も一色小学校も連携をして幼児園にいる子がこちらだけうらやましいなということがないように2校と1園で協力して連携をしている。

新井主幹 : 年間を通じて様々な交流を行うが、卒園生がいる小学校だとそういった関わりを重視しているので、基本的に年間通じてというのは近くの学校と園ということになるが、他の園に行くことはないのかというのが幼児教育を学ぶ会です。それは全体で行っているので、市内の学校の1年生の先生が糸貫西幼児園に集まって、糸貫西幼児園の保育を学ぶというかたちをとっている。

黒田委員 : 本巢市の良い特徴というのは12年間も一貫教育ができています。とても素敵なおこと。令和5年度、小学校1年生の不登校の子が9名。岡田対策監の令和5年度41名が不登校でそのうちの9名が1年生。今年度は何名か。令和4年度は何名か。

岡田対策監 : 低学年の不登校児童が増えているという傾向はある。中学校は比較的全国平均に比べると良いが、小学校の不登校、学校に適応できない最初の段階で、適応できない子が何人かいるということはある。

黒田委員 : 小1プログラムは解消できていないと考えていいか。

岡田対策監 : 不登校までは行かなくても、忙しい親と親の愛着関係が十分できていないケースもあるので、丁寧にみんなで考えていこうと支援していくしかないと考えている。

高木事務局長 : その他に意見がないことを確認した。
協議題(3) 社会教育課の取り組みについて説明を求めた。

野原課長 : 資料及びプレゼンにて説明した。
(資料 ホープ防災リーダーズの取り組みについて)

高木事務局長 : 東北派遣については後日子どもたちの生の声を聞いていただきたいと思う。
社会教育課の取り組みについて質疑、意見を求めた。

汲田委員 : 自ら動き出す子を目指して取り組んでいる。算数数学の体験や中島さち子さんの数学のまちづくり講演会や広島研修や東北派遣など、全てが自ら動き出す子を作るための事業だと思った。4つの放課後児童クラブの子に手品を見せた。ある放課後児童クラブは昨年度に比べると良い姿勢で見てくれた。また親さんの姿勢もある。持ち物を放課後児童クラブの入口に表示をしてくれていたが、これは持ってこないでと表示していても持

たせてくる。こういうことを受け止める親の力が大きい。親の力と言われたがそうだと思った。親も一生懸命子どものためにと考えられると良いと思った。

小澤委員 : ホープ防災リーダーズの高校生の子は時間が経てば年齢も上がっていき、大学生、社会人になっていく。大人になったときの繋ぎ止めを考えて、本巢市に住むと将来消防団や自治会役員になったりしたときに知恵を発揮できるような社会にしていくためには、そういう人たちをつなぎ止める。小学生、中学生を育てるのも大事だが、そういう人たちをつなぎ止める取り組みも大事ではないか。

野原課長 : ホープ防災リーダーズは中高校生が対象で、中学生は卒業して高校生と一緒に活動していくことになっている。今回東北派遣の団員の中にも高校生が4人おり、他にも行きたい高校生はいたが、学校の授業や部活があり行けなかった。しかし、研修の集まりには参加して、市防災訓練では自分たちでブースを出すその時には高校生もおり、活動が広がっていくよう支援をしていく。

松浦委員 : 本当に災害などが何か起こったときに地域の人や誰がいるなど知っていることが大事だと思う。地域の活動に子どもが参加することはすごく大事だが、先ほど話があった夏休みのラジオ体操は各地域、自由になった。やらない地域が私が聞いただけでも2~3地域あり、0という地域もあった。廃品回収も昔はあったが、古紙など引き取ってもらえないこともあって、なくなったしまった。廃品回収はお年寄りのところに子どもたちが取りに行くとか、活動でお年寄りとの繋がりがあったが、今は少なくなった。地域の防災訓練も子どもの習い事とかで参加が少ないと思う。防災訓練へみんな参加しようという発信を小中学校でして、地域の繋がりと良い。

黒田委員 : 確固たるビジョンのもと教育活動の施策が行われている。汲田委員の話の中にもあったように中島さち子さんや秋山仁先生の講演、ホープ防災リーダーズや広島研修やICTの充実、今日の報告にはないが小学校へ教科専門指導員が入っていると教育活動が充実していると私は思っている。これは全部予算が必要。市長さんがみえるので、限られた予算の中で展開するのは難しいとは思いますが、少しでも考えていただきたい。

高木事務局長 : 今日の会議全体について意見はないか。

藤原市長 : 教育は子どもたちへ未来を託す、地域の将来を託す大事な分野。教育への投資は将来の財産へ繋がる。地域を守ってくれるような子どもに育てていってくれることを願っている。そのためにも一緒に頑張っていきたいと考えている。

高木事務局長 : その他質問等がないことを確認した。

高木事務局長 : 閉会を告げた。

閉会 午前11時30分